

戦艦白虎として転生した男

しろくまメロン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

久崎 冬真は神様からのお願いによって艦これの世界に転生させられた。

そんな彼の物語が今ここで始まる。

☆注意☆

人称がおかしいところがあります。

艦これの2次創作です。

作者の勝手な妄想です。

不定期更新です。

それでもいい人は見ていってください。

目次

設定集かも	1
プロローグかも	7
1話 異世界かも	10
2話 救助かも	13

設定集かも

本作の主人公：久崎 冬真

・戦艦 白虎型一番艦白虎

艦級：白虎級

船籍：アイヴィス連邦共和国海軍

所属艦隊：第一遊撃艦隊旗艦

―諸元―

・基準排水量：309,975 t

・満載排水量：482,005 t

・全長：665 m

・全幅：140,5 m

○兵装

・75口径85cm3連装砲塔：4基 12門

提督「異世界の技術は凄いわね。」

大和「ずるいですよ。大和も51cmでもいいから載せてほしいです」

提督「我慢しなさい」ニガワライ

武蔵「提督よ、この武蔵にも同じものを載せてほしいんだがいいだろうか？」

・65口径56cm3連装砲塔：4基 12門

金剛「oh：さすが異世界の技術デスネー」

比叡「ヒエエエ確かにすごいですね。金剛お姉さま」ヒエエエ

・対空ミサイル『リヴェル』三連装：10基 30門

※秋月型防空駆逐艦より性能が良く狙ったらほとんどの確率で命中する

ちなみに何度でも傾くような仕組みになっている

秋月「まさか対空も凄いなんで……」

照月「秋月姉元気出して」ニガワライ

初月「提督：僕の出番はある？あるよね☑」ハイライトオフ
提督「シロメ

・対潜水艦用魚雷『ガイナス』

52 cm 3連装魚雷発射管：2基 6門

・対艦用魚雷『ディアス』

68 cm 5連装魚雷発射管：2基 10門

・40 mm 3連装機銃：36基 108門

・35 mm 単装機銃：6基 6門

・20 mm 連装機銃：4基 8門

・20 cm 26連装噴進砲：2基 52門

・電探妨害装置

※敵艦の電探を妨害することができる。

また、自艦は敵艦の電探にうつることがない。

・対艦レーダー

※電探妨害装置を持っていてもうつるような仕組みになっ
ている。

明石「物凄く弄りがいがありそうね」

夕張「確かにそうですね」

○装甲

・舷側 640 mm

・甲板 420 mm

・主砲防盾 800 mm

・艦橋 600 mm

○搭載機

・ワカサ (観測機)：3機

・エリス (偵察機)：10機

・ガイズ (攻撃機)：7機

最大：20機

カタパルト：2基

瑞鶴「今度どれかでもいいから使ってみたいね。翔鶴姉」ズイズイ
翔鶴「ええ、そうね」

加賀「五航戦の子なんかが使えるわけないでしょ。でも、確かに少し使ってみたいものだわ」

○速力

・遅い時：30ノット

・通常時：42ノット

・最大速力：68ノット

島風「島風よりはっやーい……私おっそーい……」シヨボン
天津風「元気出しなさい島風。勝てるわけないじゃない」ナゲナゲ

○機関

・馬力：360,000

・小型原子炉：4つ

・原子炉：1つ

○航続距離：無制限

※世界から海水がなくならない限り航続可能

竣工時の乗員：3,265人

最終時の乗員：4,134人

当時の艦長：紀川 亮平

○同型艦

・白虎型二番艦 朱雀

艦種：空母

所属艦隊：第一遊撃艦隊

※一航戦の加賀や赤城などの空母と比べ物にならないくらい大きく、収納することができ艦戦機の量が倍以上ある。

・白虎型三番艦 青龍

艦種：潜水艦

所属艦隊：第二艦隊

※音を立てずに敵艦に近づき魚雷を放つことができる。

・白虎型四番艦 玄武

艦種：航空戦艦

所属艦隊：第一艦隊

※白虎の火力や朱雀の艦戦機の量に劣るが両方の火力を合わせると二艦と張り合うことができる。

・白虎型五番艦 麒麟

艦種：戦艦

※建造されたが他の軍艦に場所を譲らないといけなくなったため進水する前に解体される。

・白虎型六番艦 鳳凰

艦種：空母

所属艦隊：第三遊撃艦隊

※艦隊に入った二週間後に敵国の重巡と軽巡、駆逐艦に囲まれ交戦し戦没。

○装備（建造すると出てくる？）

●魚雷

・五連装音速魚雷／四連装音速魚雷

音速で水の中を進んでいく魚雷。威力も普通の魚雷と変わらない。

・五連装追尾型音速魚雷／四連装追尾型音速魚雷

音速で水の中を進んでいく魚雷だが敵艦を捕捉してからでないと追尾することができない。追尾することができる代わりに威力が少し下がる。

・リゲル式魚雷 五連装／四連装

普通の魚雷とスピードは変わらないが三倍近くの威力を出すことができる。

・リゲル式魚雷 【改】 五連装／四連装

普通の魚雷とスピードは変わらないが五倍近くの威力を出すことができる。

・リヴァイア 五連装／四連装

遠距離からでも敵艦を追尾することができ、音速で水の中を進んでいく魚雷。威力も五倍近く出すことができる。

●艦戦機

・ワカサ (観測機)

・フサキ (観測機)

・エリス (偵察機)

・シード (偵察機)

・ガイズ (攻撃機)

・ハヤブサ (攻撃機)

・ボルド (爆撃機)

・ゲイル (爆撃機)

・性格：ものすごく優しい。困っている人がいると助けてしまうような紳士。大事な人を傷つけられるとものすごく怒る。仲間のことを傷つけることが嫌い。意外と寂しがり屋。

・容姿：道を歩いていると女性が見つめてくるくらいイケメン。身長は大体180〜185cmくらいある。髪の毛は黒髪で目の色は黒い目と蒼い目のオッドアイ。戦闘時の服装は袴を着ている。

・好きな物、人：お菓子、動物、動物に似てる艦娘

- ・ 嫌いな物、人：深海棲艦、仲間を傷つける人
- ・ 所属：大日本帝国海軍トラク泊地
- ・ 所属艦隊：第一遊撃艦隊旗艦

プロローグかも

「ここはどこだ？そしてなぜ前が見えないんだ？」

目が覚めると俺は知らない場所にいた。それと、なぜかわからないが目の前が見えない。

「俺は確か……何をしていたんだ？」

ヤバイ……ここに来るまで何をしてたのかすら思い出せない。そしてここがどこかすらわからない。とりあえず大声を出して誰かしらに気づいてもらわないと。

「うるさいの。もう少しくらい静かにできなのかの。」

突如現れた声に俺は戸惑いを隠せなかった。

「あなたは誰ですか？それと出来ればこの状況をどうにかして欲しいんですが」

「ああ、すまんの。ワシは其方たちの世界でいうところの神じゃ。後、それはどうにかできないから我慢しておれ」

は？……今の聞き間違えじゃなかったら神って聞こえた気がしたんだけど……俺の頭がどうにかしちまったのか？

「聞き間違えじゃないぞ。後、其方が考えてることくらいすぐにわかるんだからの」

??でもなんで神様が俺のところにいるんだ？

「ここに来る前に何をしておったのか考えてみる」

ここに来る前？ええつと確か……道端で暴れていた男性と襲われていたお爺さん見つけて確か……！そうだ思い出した。お爺さんを助けた時に暴れていた男性に刺されたんだった！

「お爺さんは無事なんですか?!」

「其方が助けてくれた年老いた爺さんがワシじゃよ」

「そうだったんですか。それで、俺をここに呼び出した理由はなんですか？まさか、ただお礼を言うだけの理由で呼んだわけじゃないですよ
ね」

「ああ、そうじゃった。それで本題の方なんじゃが、とある世界を救って欲しいのじゃがいいかの」

「それならいいですよ。もう一度死んだ身でもありますし」

「返事をするのが早い。まあそっちの方が都合が良いのじゃがな。それで救って欲しい世界というのがこの世界なんじゃが」

その言葉と同時に神様に映像を見せられた。それはあまりにも俺が住んでいた世界とは違った世界だった。なぜなら、女性や小さい女の子が何かわけのわからないものを身にまとって黒色をしている生き物と言っているのかすらわからない生物と海の上で戦っているのだから。

「そこに映っている女の子たちは艦娘といい艦装というものを身にまとい深海棲艦という黒色をしているものと戦っている映像じゃ」

「これって圧倒的に深海棲艦とやらが悪者だよな」

「その通りじゃ。この世界はワシが管理している世界の一つなんじゃが人類が絶滅の危機に瀕していて、ずいぶんと後じゃが深海棲艦が大规模で攻めてきて人類が完全に滅んでしまうのじゃ」

「要はその深海棲艦を倒していき、人類が滅ばないようにすればいいということだな？」

「そういうことじゃからよろしく頼んだぞ」

「だけどこのまま俺が行っても意味がないと思うんだが？」

「そうなんじゃ。だから其方にはワシが管理しておる世界の軍艦の艦装と専用の妖精をつけるから、困ったら妖精を頼りにすればよいぞん？…妖精ってなんだ？」

「そうじゃった。妖精についての説明を忘れとった。妖精とは、艦装に居る者のことを指すんじゃ。しかもいろんなことができるから頼りになるぞ。まあ、これに関してはこの世界に行ってからの方が理解しやすいじゃろ」

「そうか、分かった」

しかし、妖精とはいろんなことができるのか。これからは尊敬の意を込めて妖精さんと呼ぶことにしよう。

「それとここから出るとワシにはもう見守るくらいしかできんから要望とかがあったら先に行つとくれよ」

「もうなにもないですね」

「わかったぞ。では、すぐにこの世界に送らせてもらおう。ここでの記憶や其方の名前、年齢くらいしかの記憶しか残らないが大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。有り難うな。こんな俺にもう一度命を与えてくれて」

「こちらこそ頼みを聞いてくれて有り難う。其方の進む道に幸あらんことを」

「ああ、それじゃあな神様」

1話 異世界かも

「ガハッ…」

激しい頭痛とともに背中の部分に何かあるなど感じながら起きてみると目の前には海が広がっていた。しかも、見渡す限り海しかないところも含めると映像で見たあの世界に来たんだと身をもって実感する。

「なんか不思議な感じがするな。海の上に立つなんて」

背中にある艤装を見てみると模型で見たことあるような大和型戦艦とは比べ物にならないくらい大きい艤装だった。

さっきの頭痛で分かったことがある。俺は名前と年齢と神様と話したことくらいしか記憶が残っていない代わりに、この軍艦の記憶と艤装の動かし方、どんなのが付いているのかという記憶があった。

さっきから肩らへんに何か歩いているような妙な違和感があるなど思い振り向いてみると、小さな小人？がいた。これが妖精さんというやつなのだろうか？

「艦長さんどうもです。私はこの戦艦白虎の艤装の副長を担当することになった者です」

ビシツと海軍式の敬礼をしている可愛らしい妖精さんがいた。

「どうも。久崎冬真くさきとうまです。えっと、君は妖精さんであつてるかな？」

「はい、そうですよ。困ったことがあつたら何でも言つて下さい。できる限りの範囲内でしたら頼まれたことは何でもします」

「えっと、それじゃあさつそくなんだが艦載機を何機か飛ばしてくれるか？」

「了解しました。偵察機『エリス』を六機飛ばします」

「ああ、了解した」

その言葉と同時に偵察機『エリス』が六機が発艦された。

しばらく航行していると、副長妖精から

「ここから南西の方角に深海棲艦と思われる艦隊を発見しました。戦艦二隻と空母一隻、重巡一隻、駆逐艦二隻という艦隊の編成ですがど

うしますか?」

うーん…空母がいるのか…だが、一隻程度なら大丈夫だろう。

「それじゃあ、これから南西の方に進み深海棲艦を倒しに行く。観測機『ワカサ』を飛ばして弾着観測射撃の準備をしてくれるか?」

「わかりました。それでは、さっそく観測機『ワカサ』の発艦準備を開始します。」

やはり、妖精さんは頼りになるな。だって、妖精さんがそう言った数秒後にはもう発艦してるんだもん。さすがとしか言いようがないよ。

最大速力で南西の方向に航行していること数十分、

「艦長さん、報告します。敵艦隊が弾着観測射撃の範囲内に入りました」

敵艦隊が範囲内に入ったのか。うーん…どうしようかな。砲雷撃戦で一番の脅威となりうる戦艦を最初に狙うかそれとも制空権をとれないから空母の方を先に狙うか、本当に迷うな。だけど、ここは敵の空母が未知数だから空母の方をねらうとするか。

「報告有り難う妖精さん。それじゃあ、敵の空母を中心に弾着観測射撃を行うから弾薬の準備をしてくれるか」

「わかりました。弾薬の準備の方はできているのでいつでも砲撃することができます。」

弾薬の方はもういいのか。ならば…

「全砲門、敵艦に向かってっ…つてー!!」
ドゴンツツ!!

大きな音とともに俺が放った砲撃が敵艦隊にいた空母に命中した。

「報告します。敵艦隊に命中しました敵艦隊の損害について、空母一隻と駆逐艦一隻が轟沈し、戦艦一隻と駆逐艦一隻が小破、戦艦一隻と重巡一隻が無傷といったところですよ」

「そうか。なかなかといったところだな」

しかし、さっきの弾着観測射撃できずかれたのか敵艦隊がこっちのほうに向かってきていた。

「妖精さん、弾薬の方は次弾装填されてる？」

「はい、もう装填しています。」

さすがは妖精さん。することがいろいろと早くて物凄く助かってるよ。それじゃあ、敵艦をすべて轟沈させるとしますか。

「敵艦捕捉、全砲門…ってー!!」ドーン

敵艦を全艦轟沈させることが出来たかな？

「敵艦隊の損害を報告します。重巡一隻と駆逐艦一隻が轟沈しましたが、戦艦一隻が中破どまりです。それと、敵戦艦からの砲撃を確認しました」

まじかよ。全部仕留めたと思っただけだな。戦艦を仕留めそこなったか。しかも、砲撃してきてるし…はあく

ため息ついている場合じゃないな、敵の砲撃を避けなければ。

「ツよし、とりあえず敵の砲撃は避けれたな。妖精さん、弾薬の方は？」

「次弾装填の方は済んでいます。いつでも砲撃可能です」

「有り難う」

準備の方は整ったな、

「これで最後だー!!…全砲門撃てー!!」ドーン
当たったな

「敵戦艦の轟沈を確認しました」

妖精さんの声と共に冬真の戦艦白虎としての初めての戦闘が幕を閉じた。

うに決まってるじゃん」中破

「そうだね、僕も川内と同じく最後まで諦めないよ」中破

「私も最後まで戦わせてもらいます」中破

「ナンドデモナンドデモシズメテヤル：イマイマシイカンムストモ
メ」

制空権はこちらが有利ですね。しかし先ほどの戦いで失った艦載機の量が多すぎます。これでは3分保つかどうかというところですね。

「キヤア」小破↓大破

「赤城さん!!大丈夫ですか!」

赤城さんが大破してしまった以上制空権を確保し続けるのは難しいでしょう。

「皆さん、これ以上制空権を確保し続けるのは無理です!空からの攻撃に注意しててください」

「分かりました」「了解です」「オーケー」

制空権を失ってしまった以上ここで終わりですかね。援軍が来るとしても少なくとも後15分かかります。

「キヤア」小破↓中破

とうとう艦載機すら出せなくなりました。もう、諦めるしか選択肢はないのでしょうか?

「加賀さん、避けて!!」

「え」

ああ、もう死ぬのですか。これが運命私の運命なのでしょうか?

「ツ!!加賀さん、鎮守府に居る皆さんを置いて死んでもいいんですか!」中破よりの小破↓中破

「!大和、お礼を言うわ。有り難う」

「最後まで諦めずに戦うよ!」中破↓大破

「頑張つて最後まで戦ってみんなのところに帰ろう」中破↓大破
「最後まで頑張りましたよ!」中破↓大破

ダメですね、こんなに暗い考えをってしまった。皆さんの言う通

り最後まで戦い抜いて見せましょう。しかし私と大和以外の全員が大破しています。何か解決策は…ここはやはり私を殿にして皆さんを逃す、それしかありませんね。

「皆さん、私が殿をしまさ
ドーン」

皆さんに伝えようとしたらと大きな音とともに戦艦一隻と空母一隻、重巡一隻、軽巡一隻が轟沈していました。これは援軍ではなさそうですね。まだ来るはずがありませんので。だけれど、こんな所に出撃する艦隊つてありましたっけ？いいえ、提督からここに来るのは私たちだけと伝えられていましたし…誰がやったのでしょうか？

「イマイマシイカムストモメ…キサマラノナカマカ…マアイイ、ナンドデモシズメテヤル」

さつき魚雷を落としたのはあの艦載機でしょうか？でも、あんな艦載機は見たことがありません。しかも、電探に私たちと深海棲艦以外の反応がひとつもありませんね。これでは何処にいら
ドーン

!?!砲撃音がしました!!北北東の方からです！でも、何故あんなところにいるのでしょうか？

「ナゼスガタガミエナイ！ハヤクシユウイヲソウサクシロ！サモナイトウツゾ！ヲキュウ！」

「ワツヲ！ワツワ（訳：姫さま！先ほどk）」ドーン

先ほどの砲撃で空母が二隻とも轟沈したようね。他にも、浮遊要塞が二隻轟沈しましたね。大和よりもずっと強そうな気がします。

「チツ！マアイイ…コウナツタラコイツヲヒトジチニシテオビキダシテヤル」ガシッ

「キヤア、やめてください。離して、加賀さん！誰か！助けてください！」

ああ赤城さん誰かッ！誰でもいいです。助けて下さいッ！

この音は…!?!艦装の音！明らかに誰かがこちらに向かって来てる。でも…人影が一つしか見えません。大丈夫なんでしょうか？

「フフ、ヤットキタナ…ソコノオマエコイツガドウナツテモイイノカ！」ガチャ

「嫌、嫌あ…死にたくないです。誰でもいいから助けてください」

「あのさあ、何で俺が出てこなかったからって女の子を人質にしてるわけ？もうちよつと頭使いなよ」

声的に男の人ですね。でも男の人が何故艦装を着けているのでしょうか？しかもよく見てみるとなかなかのイケメンです。私たちの提督がくらいつきそうですねってそうでなくて、

「貴方は誰ですか？」

「ん？ああ俺？俺は白虎型一番艦白虎、戦艦だ。まあ宜しく。それよりも今はあいつを助けるべきだな」

戦艦白虎ですか…聞いたことも見たこともありませんね。しかし、彼が嘘でもなさそうですね。あとで聞いてみましょう。

「キサマカ、サツキカラミエナイトコロカラハウゲキシテキタノハ」

「ああ、そうだ。それがどうした？」

「ツキサマア！シズメテヤル！キサマダケハゼツタイニシズメテヤル！！」

「ふーん、じゃあ姑息な手は使わずに一对一で戦おうよ。俺が勝つたらこいつらは見逃してもらおう。お前が勝つたらなんでも言うことを聞こうじゃないか」

「イイダロウ、ノツタ。コチラガカツタラキサマフクメテシズメテヤル」

「良いぞ、かかってこい」

そんな挑戦無謀ですよ。一人で姫級を相手にするなんて……

しかしそんな考えは消え去ってしまいました。何故なら…姫級が彼を相手に翻弄されているからです。本当に凄いです。先程から姫級の砲撃が一切当たっておらず、彼の砲撃を受けて大破しています。

「戦い始めてからまだ3分も経ってないのにもう戦えないんだ。残念だったな、お前の負けだぞ」

「ツクソ、テツタイスルゾ！」

「逃すと思うか？」ドーン

「シズメテヤルツ、ツギアツタラゼツタイニシズメテヤル」

彼は先程まで私たちが苦戦してた相手をどんどん沈めていきます。

流石ですね。

「もう居なくなつたか。それで、君達はなんでここに居るんだ？」

「出撃が終わって帰投していたところで襲われました。でも、貴方はなぜこんなところに居るのですか？」

「気が付いたらここにいた」

「そうですか、取り敢えず助けて下さつて有難うございます。それと、今から貴方を連れてきていいか提督に聞いてみます」

「ん、ああ、有難う。それと君、立てるか？」

「はい、先程は助けて下さつて有難うございました」

「女の子を助けるのは当たり前だろ」

「後、聞きたいことがあります」

「なんだ？何でも聞いていいぞ」

「では、貴方は自分の事を兵器だと思えますか？」

「んく分からないな、時と場合によるんじゃないか？」

「それは…どういうことですか？」

「深海棲艦と戦つてる時は兵器だつて思うし、普通に過ごしてる時は一人の人間だつて思つてるよ。感じ方は人それぞれじゃないかな」

「答えてくださつて有難うございます」

「あつ、そうだ、君の名前はなんていうの？」

「私は正規空母の赤城といいます」

「提督から連れてきていいと言われたので付けてきてください」

「ああ、わかつた」

はつきりと聞こえませんが援軍が来たみたいですね。

「加賀さん、大丈夫ですか？」

「あれ？敵は??」

「私は大丈夫よ、それと敵は彼が倒したわ」

「クソツ、私も戦いたかつたぞ」

「長門、落ち着きなさい」

「お兄さんは誰っぼい？」

「俺か？俺は戦艦白虎だ」

「それでは今から帰投します」

私の、いいえ、私達の命がこの人に救われた。
本当に感謝の言葉しか出ませんね。
これからの生活が楽しくなりそうですね。